

十六で表彰された親孝行な子守女

永代美知代

私の郷里にあつた話です。

皆さまは備後の尾道と云ふ港を御存じですか、以前流行つた鐵道唱歌に「寺に名高き尾道の」と云ふ文句がありましたわね。昔から中國で名高い船着きです。あれからずつと北へ入つて、出雲路へ出ようと云ふ街道に、備後の國甲奴郡本郷村といふ淋しい片田舎がございます。

その本郷村で一番の財産家、永井家の奉公人にた

け女と云ふのがありました。たけ女がお嬢様付きの子守女として、はじめて御奉公にあがつたのは、まだやつと十一の春でした。

十一と云へばまだ幼い、母親の袖に取り纏つて、おいしいお菓子でもねだつてゐやうと云ふ年頃ですが、たけ女は貧しい水呑百姓の家に産れて、てんでそんな事をした覚えもありません。親のため、家の助けに、お給金の前借をして、自分から進んで永



井家へ御奉公にあげりました。

たけ女はよく働く娘です。朝は暗い中から起きて出て、お嬢様のおめざめまでに、長いお廊下をすつかり綺麗に拭き掃除をして、柔順にこまめに何彼と女中さん達の手助けをするのでしたが、お嬢様は大切に御守をする、おしめの世話は行き届く、それに小柄な可愛い顔付きの、氣のやさしいのが氣に入つて、何でも彼でも『たけや、たけや』と奥様がお可愛がりなさる。

『本當にあんな出過ぎ者つてありやしない。』

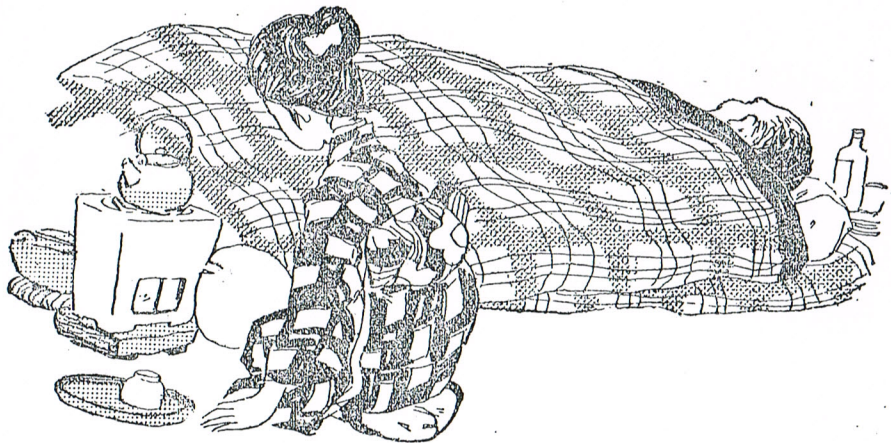
女中達は自分の氣の利かないのを棚に上げて置いて、そろ／＼たけ女を嫉みかゝりました。その癖、少し忙がしい時など、たけ女がお嬢様を負つて外へ遊びに出たりしてゐると、手傳つて貰へないので大困りをするのですが、人間ほど勝手なものはありません。

『何だねえおたけさん、幾らお嬢様のお守りだからつて、そんなに外へばかり出て居ちや困るぢやないせん。』

おなりなすつた。』  
たけ女は、内々喜んで居りました。

すると思ひがけもない、大變な悲しい事が起りました。

一體たけ女の父様は叩き大工が職業で、手間安とあだなをつげられてゐたほどの、まだ一人前の大工としての賃錢も貰へず、方々の職場へ、やつと手間に入つて仕事をさせて貰ふ位な男なのでした。ですから自然家の生計も立ち行かず、たけ女の母親はまだ乳離れのしない子供を抱へて、貧乏な中に目の見えない年寄の世話もして行かねばならぬ苦しさでしたが、急にその働きの人の手間安が大怪我をして、



の、ちつとは氣轉を利かして、お前に出來さうな走り使ひでもするが好いちやないか、へん、お前の遊びやにも呆れたもんだよ、そら、何を問誤々々してゐるんだねえ、この忙がしいのに、ぼんやり臺所なんぞに立つて居ちや、邪魔つけぢやないかね。』  
こんな風にたけ女は始終虐められてばかりゐるのでした。

『御免なさい、何か私に出來さうな事があつたら、何でもしますから。』

豆腐を買つて來たり、按摩さんを迎へに行つたり、無論さうした走り使ひは、何處でも子守女の役です。たけ女は御飯焚きから漬物の出入まで、女中のお手傳ひに、おさんの方も兼ねて勤めると云ふ有様でした。

『本當に奥様のお氣に入りだよ、おたけさんは！』  
女中達も終ひには虐め方に困つて、折々こんな當て付けを云ふ位が關の山でした。

『まあよかつた。ねえさん達も此頃は餘り叱らなく

身動きの出來ない片輪者になつてしまひました。

それを聞いたたけ女は、悲しさに氣を取り失ふ程でしたが、今更どんなに嘆いた處で仕方もありません。幼いけれども根が剛巧な彼女は、徒らに嘆き悲しんで、主家の仕事をなほざりにするやうな事はしませんでした。たい密かに決心して、毎晩御主人の御用を濟ませた後、そつと主家を出て、それから小半里も隔てた親の家へ、淋しい夜路を辿つては、一晚父母を慰め、年寄つた祖父の腰をさすつて、一番鶏の鳴くのと一緒に、また永井家をさして飛んで歸ります。  
初め一二週間は、仕合せに誰



もたけ女の素振りに氣のつくものとしてありませんでした。ですが、二十日、三十日と續けてゐるうちに自然と他の女中達に解つて來ました。

『この頃おたけさんは如何したんだらう、毎晩寢床は空あきだよ。』

『私は初めのうちはお便所だとばかり思つてゐたけれど、幾ら待つても歸つて來ないんだものね、不思議ぢやないか。』

女中達は寄ると觸ると、こんな噂を合ひました。『どう／＼親の家が戀しい餘りに、母親の顔を見に出掛けるものと、皆できめてしまひました。』

『おたけさん、お前、今年で幾つになつたのだつたね。ナニ、十一だつて、うそをお云ひよ、まだやつと七八つなんだらう?』

或時は、わざとにこんな事を云ひかけて、それとなくたけ女が夜分親の家へ出かけて行くのを、あてこすつたりする者がありました。ですが、たけ女は何と云はれても、毎晩片輪者の父を見舞つて、眼の

見えぬ祖父の看病に出かけました。お奥からおやつに頂いた鹽煎餅は勿論、晩の御飯のおかずも、お汁の他はみんな紙に包んで、自分は一口も頂きません、そつと人目に立たないやうに、親の許へ持つて行くのです。

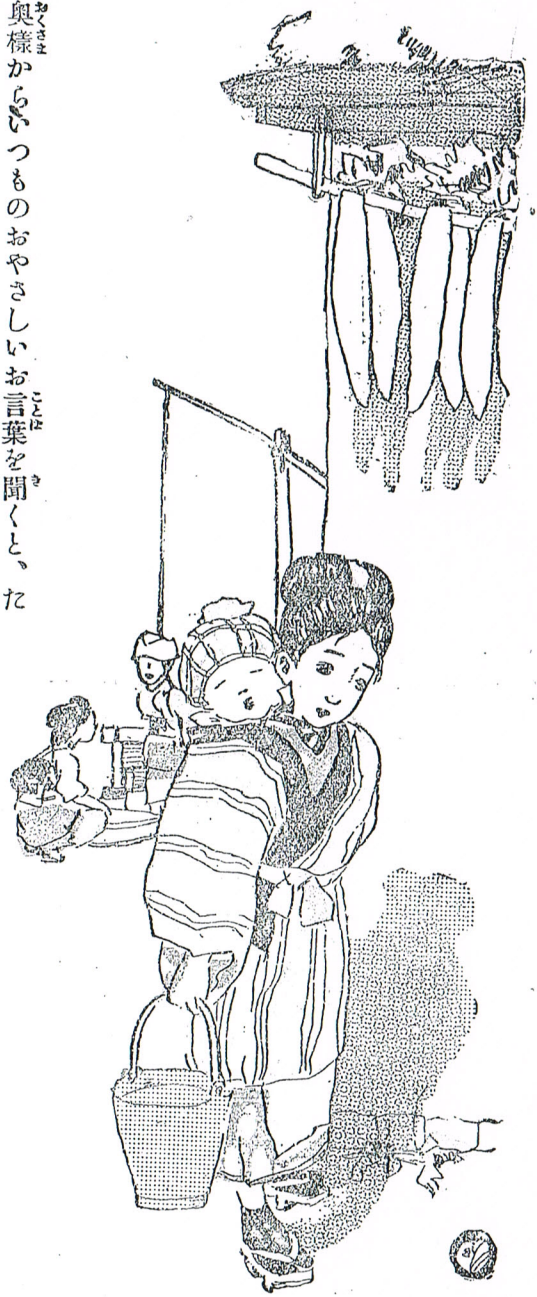
意地の悪い女中達は、たけ女が毎晩何處に行くかすつかり知つて居りながら、それは云はないで、たけ女が變に思はれさうな噂ばかり立てました。

『奥様、妙な事を申し上げますが、この頃おたけは如何云ふものか、毎晩女中部屋では寢まないで、曉方まで姿を見せません。』

とう／＼しまひには、こんな風に奥様に云ひつたものさへありました。

『それは又如何した事か!』奥様は甚くお驚きなすつて、早速たけ女を奥へお呼びになりました。

『たけや、私は決して叱りはしないから、何にも隠さないで云つておしまひ、お前はどの頃、毎晩のやうに何處へ行くの。』



奥様からいつものおやさしいお言葉を聞くと、たけ女は堪らなくなつて、はら／＼と涙をこぼしまし

た。『さあ、泣かないでお云ひよ、悪い事をしたと思へば、この次ぎからしないやうにさへすれば好いんだから、ね、何處へ行くの?』

『奥様、濟みません!』  
そしてたけ女は泣き伏しました。

『もしやお前は、親の家へ行くのではないかい?』  
ふと奥様は斯う氣がつかました。

『奥様、つい家の事が氣になるものですから、濟まない事を致しました。』

『無理もないわね、お父さんがあんなだものねえ。これから七日目七日目に暇をあげるから、その日は朝早くから行つて、終日居て來るが可い。』



お情深い奥様は、お叱りになる處か、かうも有り難いお言葉を下さいました。

『それでは餘り勿體なう御座います、私はそんなに朝からお暇を頂かなくとも宜しう御座いますから、その代り、夜だけお暇を頂いて、親共を見てやりた

いと存じます。』  
たけ女は奥様からどんなにすゝめられても、とうとう七日目七日目にやらうと仰有るお暇は貰ひませんで、相變らず毎晩小半里の道を驅けて行つては、曉方主家の御用の缺けないやうに飛んで歸りくしました。

十一、十二、十三、十四、十五、十六、都合六ヶ年間、雨が降つても、雪が降つても、たけ女は一晚として親を見舞はない事はありません、月明りをたよりに、倒れかゝつた家のぐるりの僅かな空地をたがやして、芋を植ゑたり、麥を撒いたり、さうかと思へば、又河へ入つてやにぎりをしたりする。

やにぎりと云ふのは河岸の岩と岩との間に手を突

悪い事を云つたりした女中達も、その時分の事を後悔して、皆たけ女の前に自分を恥かしました。

するうちに何時ともなく、たけ女の事が縣廳に知れました。たけ女は親孝行な感心な娘として、そして又六ヶ年間勤続の忠婢として、公に表彰の式を擧げられました。

無教育な賤しい子守女でありながら、何と云ふ立派な、感心な心がけの女でせう。

皆様、たけ女は今も遠い備後の山里に、主を思ひ親を思ひ、専心自分のつとめを盡してゐます。どうぞたけ女の上に幸あるやう、私は皆様と御一緒に祈りたいと思ひます。

(なほり)



き入れて、その中にゐる鰻や鯰のやうな魚を握り出すしかたです。折々は鰻の代りに石垣の中に眠つてゐる蛇を抜き出したりして、男でも餘り氣持の好いものではありません。それをたけ女は若い身空で親達に食べさせたい一心から、嫌だとも感じないでせつせとやつてのけるのでした。

それにたけ女自身にとつても嬉しいのは、自分が一つでも餘計に年をとればとるほど、自然何彼に氣がついて、父や祖父の、ぼろ／＼に破れた着物もつき直す。裏の空地へ、一うねでも餘分に麥を蒔くと云つた風で、おまけに永井家から頂お給金さへ、一年は一年と増して行くばかりですから、段々不運な家にも、何處となく希望の薄明りが射すやうに思はれました。

仕合せはそればかりか、この事が何時か村中に知れ廻り、永井家の子守女たけ女の親孝行と云へば、近郷近在誰一人知らないものはありません。以前たけ女を嫉んで、色々あてこすりを云つたり、意地の